

〔紹介〕

矢数道明著『近世漢方医学史―曲直瀬道三とその学統』

わが国の医学の流れは、その学統によつて、和方・漢方・洋方の三つに分類される。そのうち、いわゆる漢方医学は、中国伝統医学系であるが、中国のそれ（中医学）とはかなり異つた、わが国独自の発展を示した。それは、近世において田代三喜に学んだ曲直瀬道三によつて、中国伝統医学系のうち李朱医学を日本化し体系づけられ、その学統が全国を風靡し、道三は近世医界の天下人となり、さらに江戸中期に古方派医学が勃興して、新展開をみせたからである。道三の学派は、古方派医学に対して後世派医学と呼ばれる。

本書の著者・矢数道明博士（医学・文学）は、後世派医学の学統を継ぐすぐれた臨床医家であるとともに、後世派医学史研究の第一人者で、著者が永年にわたつて研究発表された数多くの論考を、その後に入手の新資料によつて徹底的に補訂を加え、体系的にまとめられたのが本書で、この研究業績により文学博士の学位を授与されたものである。

本書は、序章に「日本における東洋医学の展開と後世派医学の特質」を据えて概説し、本論を二章に分け、第一章は田代三喜・曲直瀬道三の事蹟と学業を評述、第二章は道三の学統、とくに玄朔（二代道三）を中心にその門流を論述、臨床家の目と、足で新資料を発掘された永年にわたる研究成果であるだけに、現在にお

ける最もすぐれた道三関係の信頼すべき論考となっている。

さらに、附章として、江戸後期の「江戸医学」（多紀医学館）多紀元簡・元堅、「尾張医学」（浅井医学館）の浅井正封ら、考証学派の医書校刊の偉業と、古方・後世両派を止揚した医界の動向を評述、ついで明治漢方医界の吉益四峰（鉄太郎）・村瀬豆洲・浅田宗伯の事蹟に及び、多くの新知見を提示、読みごたひのある内容の濃い力作となっている。

従来、日本の医学史の中で、後世派医学は必ずしも正当な位置づけと評価を与えられてきたとはいへない、難い面をもっている。それは、江戸中期に後世派に代つて実証的な古方派が出現し、空理空論を排し、親試実験をうたつたが故に、江戸後期に出現する洋方（蘭方）医学の思想的前程を準備したとする見方が、余りにも強かつたからである。

近時、古方・古学が蘭学の出現を思想的に準備したか否かについて論議が高まりつつあり、思想的には古方―蘭学と連続するといふよりは、蘭学が認識した「理」の把握は、理を重視する朱子学思想の中から生まれたとする見方が強まっている。

朱子学思想を基盤にもつ李朱医学、それを日本化した後世派医学の役割と再認識をするためにも、本書がひろく読まれんことを望みたい。

（宗田 一）

（A5判、四三〇ページ、六千円、名著出版ハ東京都文京区小石川三一〇―五V）